

教えて！伊勢崎銘仙

Q.

伊勢崎銘仙はいつからあるの？

明治 21 年(1921 年)頃に伊勢崎太織(ふとり)の販売店が、東京の日本橋でお店を出した時に、「めいせんや」の旗を出したのが始まりといわれています。

明治 30 年には、漢字で「銘撰」として、東京三越店で販売が始まりました。それぞれの製造元が責任を持って、優良品を選んだ銘品という意味だったようです。

Q.

伊勢崎銘仙って緋なの？

伊勢崎銘仙は緋の一種で間違いありません。ただし伊勢崎銘仙の簡単な定義は、

- ①糸の原料が絹 100%であること。
- ②先染めであること。(糸の段階で色柄を染めてしまうこと)
- ③平織であること。(布を作る一番簡単な方法は、たて糸を二段にして、その間によこ糸を入れて織る)

緋は先染めですが、糸の原料が絹でなく麻糸、木綿糸で作っても緋と呼びます。

Q.

伊勢崎銘仙は他の産地の銘仙と違うの？

養蚕が盛んな北関東周辺で作られた織物の代表が銘仙でした。

伊勢崎の他に足利市、秩父市、八王子市の周辺で明治時代から昭和 30 年代前半に盛んに生産されていました。足利銘仙の代表的な技法が「半併用緋」。

秩父市では、たて糸だけに色柄を型紙を用いて染める「ほぐし緋」。

八王子市では、ほぐし緋にカピタン織り(ドビー織り)。

伊勢崎市では緋技法のすべてを生産しており、特に「併用緋」という世界でも類を見ない技法を生み出しました。

Q.

銘仙のデザインは誰がしたの？

型紙を使う「もよう銘仙」には、図案屋という職業がありました。

図案屋の下には、絵画が得意な「絵描き」と呼ばれるデザイン画を描く仕事があったようです。大阪や京都、名古屋などの大きなデパートでは、美術学校出の人を専門職として採用していました。また、緋模様を描くのはそれぞれの機屋が独自で勉強し、方眼紙にデザインしたようです。

Q.

今でも作られているの？

伊勢崎銘仙を作っている機屋は、現在ありません。

伊勢崎緋は伊勢崎市今泉町に伊勢崎緋工房「さいとう」の斉藤定夫さんが継承しています。

他には、伊勢崎市長沼町で本物志向の着尺を作っている芝崎圭一さんがおります。

染織世界では有名な芝崎重一さんの息子で後継者です。

Q.

なぜ銘仙は着られなくなってしまったの？

第二次世界大戦後、急速に洋装化が進んだことが大きな要因だと思います。銘仙は生活着、おしゃれ着でしたので、脱ぎ着するにも楽で、ファッションブルな洋服の魅力にはかないませんでした。訪問着や晴れ着など、フォーマルな場所では着る着物という位置づけではなかったことも一因だったと思います。

Q.

銘仙はどこで買えるの？

伊勢崎市文化会館で 3 月と 10 月に「アンティーク銘仙市」が 2 日間ずつ開催されています。県内のリサイクル着物屋さん、足利の着物屋さんを含む 5 店舗が恒例行事として行っています。たくさんのアンティーク、ビンテージ銘仙を見られるのはここだけです。